

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520113

研究課題名(和文) 遼・金・高麗における仏塔の浮彫荘嚴に関する研究

研究課題名(英文) Characteristics and Functions of the decor motifs at Buddhist Stupa of the Liao, Jin and Koryo Dynasties

研究代表者

水野 さや (MIZUNO, Saya)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号：10384695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：遼塔および金塔の第一層塔身には、様々な浮彫モチーフが施される。これらは塔を表面から荘嚴するもので、功德の増幅を目的とし、八大靈塔、仏像、宝塔・経幢、法偈などが(法舍利として)表される。一方、塔内の天宮・地宮にも様々な宝物を納入するが、これも功德の増幅を目的とし、仏頂尊勝陀羅尼經幢(一切の如来の全身舍利として)、高僧・王族の遺骨(僧舍利として)などである。そのような塔のあり方を保証するため、真身舎利の他に法舎利を用いても仏塔建立が可能とする『全身舍利經』および『仏頂尊勝陀羅尼經』の存在が大きい。遼塔・金塔はそれらの功德を効率よく視覚化、顕著化し、功德を保証する効果が期待されていたと理解できる。

研究成果の概要(英文)：The adornments of buddhist stupas of the Liao dynasty and the Jin dynasty have decor motifs, for example, the Buddhas(including the Vairocana), the Eight Great Bodhisattvas, the Eight Great Stupas, he remaining four carry hymns of Sakyamuni's. Large numbers of precious Buddhist relics, among them a printed copy of the sutra and a pillar inscribed with the Usnisavijaya-dharani, were discovered in the palaces of Daves and in the underground part of Northern Stupa at Chaoyang. Liao- and Jin-dynasty stupas also contain verbatim passages of the same dharani. Also, the intricate relationship between sarira offerings and the practice of copying the Usnisavijaya-dharani as a way of gaining religious merit is significant. I argue that the motifs adorning Liao- and Jin-dynasty stupas visualize that relationship.

研究分野：仏教美術史・東洋美術史

キーワード：遼塔 金塔 仏頂尊勝陀羅尼 舍利 荘嚴 全身舍利經

## 1. 研究開始当初の背景

仏教における「舍利」の性格、とらえ方は、大乘仏教、密教において、釈迦の真身舍利から經典や仏像、法偈などの法舍利、高僧や王族の遺骨を含む僧舍利などに次第に変化するが、それに伴って仏塔そのものの性格も変化することは、仏教教理学および美術史の研究分野においても、すでに周知のことである。

遼・金の仏塔について、まず、仏教教理学の研究分野においては、野上俊静『遼金の仏教』(1953年)、神尾弼春『契丹仏教文化史考』(1937年)など戦前の研究をはじめ、鎌田茂雄「華嚴思想史からみた遼代密教の特質」『印度学仏教学研究』第8巻第2号、1960年)、竺沙雅章「遼代華嚴宗の一考察 主に、新出華嚴宗典籍の文献学的研究」(『宋元仏教文化史研究』2001年)に至るまで、その研究の層は厚く、遼・金の仏教が、五台山における華嚴密教の性格を帯びるものとなされている。

建築史の研究分野においても、戦前の竹島卓一『遼金の建築と其仏像』(1944年)、村田治郎『満州の史蹟』(1944年)など、古くから研究の蓄積がある。近年は中国国内の研究者による研究に引き継がれ、『応県木塔』(文物出版社、2001年)、『朝陽北塔 - 考古発掘と維修工程報告』(文物出版社、2007年)など、詳細な研究・報告書が出されている。しかし、あくまでも建築史という視点にとどまっており、塔そのものの宗教性、信仰的な機能までの言及はなされていない。

美術史の研究分野においては、塔内に納入される舍利容器を中心とした研究が、加島勝・長岡龍作などにより進められてきた(平成14~15年度シルクロード学術研究センター課題研究「中国における舍利信仰の受容と展開に関して」研究代表者:東京国立博物館・加島勝)。

高麗の仏塔についても、石造建築の一環として、韓国国内には研究の蓄積がある。美術史の研究分野においては、本研究も同様に、石塔の表面に浮彫される仏教尊像について、仏・菩薩・天などの尊格・尊像別に、多くの取り組みがなされてきた。しかし、尊像個々の図像的および様式上の問題に終始した感が強く、浮彫尊像と仏塔そのものとの関連性において取り組む研究はない。

このような現状に対し、本研究においては、第一層塔身など、仏塔の外壁に表されている莊嚴モチーフを考察し、それを中心に仏塔の宗教性を明らかにしようとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、中国の遼・金、そして同時代の韓国の高麗において建立された仏塔の外壁に浮彫される莊嚴モチーフを研究対象とし、初期仏教以来の舍利信仰が、どのような莊嚴モチーフの選択・構成として表現されたかについて総合的に把握し、10~14世紀

東北アジアにおける仏塔の宗教性を実証的に考察しようとするものである。

2010年に行った遼寧省の調査(平成19~23年度基盤研究(S)「美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究 全アジアから全世界へ」研究代表者:東京大学大学院・小川裕允)に参加し、主な遼・金の仏塔における尊像構成の概要をまとめたが(「中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の第一層塔身浮彫尊像に関する調査研究」、『金沢美術工芸大学紀要』55号、2011年)、塔の性格が五台山における華嚴密教の思想を軸にしていることを含め、総合的に韓国の高麗時代の塔との類似点があることを把握できた。ここから、仏教信仰の性格は、塔の表面の浮彫莊嚴にも多大な影響を及ぼすものと考え、「遼・金・高麗の仏塔における浮彫莊嚴に関する研究」と題する本研究において、仏塔の外壁に浮彫されている浮彫尊像そのものから、仏塔の宗教性を実証的に明らかにすることを研究目的とするに至った。

研究者はこれまでに、韓国における統一新羅時代までの石塔の浮彫尊像についてまとめ、報告書(平成16~18年度、基盤研究(B)「韓国の浮彫形態の仏教集合尊像(四仏・五大明王・四天王・八部衆)に関する総合調査」研究代表者:武蔵野美術大学・朴亨國)も作成しているが、高麗時代の仏塔については、まだ、その一端に触れたにとどまっている。また、遼・金の仏塔については、先述の実地調査において網羅できてはならず、確認すべき作例が多数残されている。そこで、第一に、遼・金代の仏塔の浮彫尊像の造形・信仰を総合的にまとめ、高麗時代の仏塔に受容された遼・金の特徴などを考察する。

なお、近年、京都大学による調査(京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『遼文化・遼寧省調査報告書2006』)が行われ、遼寧省および内モンゴル自治区の遼代遺物に対する報告がなされた。日本国内において、戦後活発でなかった中国東北部の仏教美術の研究に、再び目を向けさせる契機となり、戦前の報告書以降の現状をまとめ、遼代文物の問題点を顕在化させようとする点においては重要である。しかし、仏塔における浮彫莊嚴を第一とする本研究においては、浮彫彫刻および関係する仏教調塑像の資料が十分ではなく、自らあらためて実地調査を行う必要がある。

以上のように、本研究は、仏塔の浮彫莊嚴から、遼・金・高麗における仏塔の機能と目的、信仰の背景を明らかにすることを研究の目標に見据え、戦前の関係資料の収集と、中国・韓国における現存作例の実地調査を中心として行うものである。今一度、戦前の研究成果を基礎とし、実地調査により現状を正しく把握し、韓国との関係性をも視野に入れた仏塔の浮彫莊嚴の調査・研究が必要である。

以上のように、遼・金・高麗において建立された仏塔の浮彫莊嚴を研究対象とする本

研究においては、その計画当初において、  
中国遼寧省、内モンゴル自治区、山西省、  
北京市における遼・金の仏塔および関連作  
品の実地調査

高麗の石塔と浮彫尊像の再分析

日本国内における戦前に刊行された中国  
東北部および朝鮮半島の仏教史蹟資料の  
再確認

以上の三点に取り組む計画であった。しか  
し、近年の日中関係の悪化により、中国東  
北部の実地調査を計画した年度に行うこと  
ができないなど、調査スケジュールに大き  
な変更が生じた。そのため、三ヶ年の研究  
期間内に、韓国における高麗時代の石塔  
の浮彫尊像に関する実地調査を遂行でき  
なかつたことは、極めて遺憾であるとし  
て、遼・金・高麗の関連性に着目し、10  
～14世紀東北アジアにおける仏舎利信  
仰を総合的に見直そうとする当初の目的  
を掲げた本研究において大きな欠陥とな  
ったことは、十分に反省しなければならない。

### 3. 研究の方法

本研究において最も重点を置いた点が、  
遼・金の仏塔における浮彫荘嚴の現地調  
査による現状確認である。戦前の調査報  
告を含め、近年の中国の報告書に至るま  
で、遼・金の仏塔に関する既存の研究書  
・報告書は、建築としてのとらえ方に留  
まっており、表面の浮彫荘嚴の詳細な写  
真を掲載する文献資料は十分ではない。そ  
のため、本研究の目的を達成するため  
には、遼・金の仏塔に対して実地調査を  
行い、出来る限りの造形作品すなわち第  
一次資料を収集することが必要不可欠であ  
る。

実地調査の対象は、遼・金の仏塔・仏寺  
が集中する山西省・北京市・遼寧省・内  
モンゴル自治区が中心となり、調査に際  
しては、遼・金の建造物に現存する仏教  
彫塑像、博物館に所蔵される仏教彫塑  
像についても、仏塔の浮彫尊像の比較  
の点から、調査対象に含める。

実地調査は、三カ年で計三回を実行し、  
調査にあたっては、事前に中国の各省お  
よび自治区の文物管理局、博物館の状  
況を確認した。平成24年度は、中国内  
モンゴル自治区と遼寧省西部、平成25  
年度は北京市・天津市・河北省、平成  
25年度は遼寧省東部の実地調査を行  
った。

### 4. 研究成果

本研究は、遼・金において建立された  
仏塔の第一層塔身に付された荘嚴モチ  
ーフを研究対象とし、初期仏教以来の  
舎利信仰とは異なる、当代仏教信仰の  
中心であった五台山における華嚴密教  
によるあらたな仏舎利信仰が、仏塔に  
どのような特徴として現れ出ているのか  
について、実証的な考察を行うことが  
目的である。

平成24年度は、内モンゴル自治区および

遼寧省西部の遼塔・金塔および博物館・  
美術館の調査を行った。まず、第一の成  
果としては、その様式および技法的特  
徴から、遼の支配体制、すなわち、契丹  
民族独自の風習・体制により支配する  
直轄地である中京・上京地区と、漢民  
族の居留地であり漢化体制をとる南京  
地区、同じく漢民族・渤海遺民による  
東京地区など、各地域の民族的伝統の  
有無・相違を考慮する必要があること  
を、強く認識することができた点である。

遼の仏教美術については、戦前におけ  
る活発な研究に対して今日ではやや停  
滞し、大きな成果が上げられていると  
は言い難い。それは、上述のような各  
地域の事情を考慮せず、一律に編年  
しようとする姿勢に起因していたとい  
えよう。まずは地域ごとに代表的な  
仏塔を考察したうえで、遼代全体の  
仏塔信仰の方向性をまとめ、遼を受け  
継ぐ金代の仏塔へとつなげていくとい  
う方向性を立て、第一に、東京地区  
を代表する朝陽北塔について取り上  
げた。

朝陽北塔は遼寧省朝陽市老城区に位置  
する。朝陽地区は、古くは燕の都が置  
かれた場所であり、隋・唐代には東北  
経営の拠点として、高句麗・渤海遺  
民の幽閉地とされた。遼代においても  
東京地区の中心地として、重要な拠  
点であり続けた。また、朝陽北塔は、  
1980年代の発掘調査により、創建か  
らの沿革が明らかとなり、遼代重修の  
目的（来るべき末法への備え）も明  
確である。

朝陽北塔に関する従来の見解は、塔  
身第一層に獣座に坐す金剛界四仏を  
表すことから金剛界立体曼荼羅と理  
解され、同じく八大靈塔を表すこと  
から舎利荘嚴・舎利信仰の側面にお  
いて語られてきた。本研究において  
は、それに加え、次のような可能性  
が提示できた。すなわち、第一層塔  
身の浮彫モチーフをあらためて確認  
することにより、背後に遼宗室およ  
びこの地に居住する漢民族・渤海  
遺民双方からみた（五台山信仰を  
集約した）仏頂尊勝陀羅尼信仰が  
あること、その具現化（造形化）に  
あたり『大乘本生心地觀經』を用  
いることで両者の側面を融合させて  
いること、そして、最終的に末法  
への備えを強調することで一致・  
統合された可能性である。

平成25年度は、北京市・天津市・  
河北省における遼・金代の仏塔およ  
び博物館・美術館の遼・金代仏教  
造像の調査を行った。仏塔外壁に  
付加された尊像と丸彫造像との間に、  
技法的にも様式的にも、ほとんど差  
がないことを再確認することができ  
た。また、この地域の仏塔とその形  
式を取り入れた僧塔ともに、第一層  
塔身に浮彫尊像を表さないことが  
多いことを特徴として認められたこ  
とは、北京天寧寺塔の再考をうなが  
す契機となり、天寧寺塔の現状にお  
ける浮彫尊像の制作年代と造営背  
景の一端と明らかにすることができ  
た。

北京市宣武区に位置する天寧寺塔に  
ついては、遼から金代にかけて、こ  
れまで複数の

意見が提示されてきた。1991年に塔の修理時に発見された『大遼燕京天王寺舍利塔記』により、遼代建立が決定的となったが、北京市とその周辺の遼代仏塔には、天寧寺塔のような第一層塔身に浮彫尊像を多数表す例がほとんどないため、現状の状態すべてを遼代のものとすることはできない。すなわち、天寧寺塔は、先の『舍利塔記』に記されるとおり、遼の天慶十年(1120)、仏舍利、仏頂尊勝陀羅尼の効力による護国、国難の回避を目的に建立されたが、この時点においては第一層塔身の浮彫尊像が施されていない。次に、貞元元年(1153)の金の燕京遷都により、天寧寺が金の中都城内の中心付近に位置する主要な寺院となったことで、大定二十一年(1181)の世宗の代に重修された。この時、もともと彫刻がなかった塔身部の表面に尊像が追造された。その背景には、契丹人・漢人・渤海人など、支配下にある諸民族の懐柔の意図があり、そのため、漢民族の唐代以来の伝統的な塔モチーフ、遼寧の遼塔の要素を融合させたものとなったと推測する。現状の天寧寺塔は、さらに明代に大々的な表面の補修を受け、清および現代の修理も受けながら保たれてきた塔といえる。

平成26年度は、遼寧省東部の遼塔・金塔の実地調査を行い、これにより、戦後報告されることがほぼ皆無であったこの地区の遼塔・金塔の現状を認識することができた点が、まず、一つの成果である。そして、遼寧省東部地域の遼塔およびそれを継承する金塔にも、他地域に共通して認められる荘嚴モチーフ(金剛界四仏、大日如来坐像を含む如来坐像八軀、八大靈塔、八大菩薩など)とともに、他地域と異なるモチーフとして、碑形装飾、扁額形装飾、法偈、梵字による仏名ないし聖音などを確認することができた。また、仏塔の状態は全体的に近年の粗悪な補修が行われており、当初の表面を完全に保っていない浮彫像も多々確認された。

以上、三年間の実地調査により、遼・金塔における第一層塔身浮彫尊像からみた仏塔の機能についてまとめるならば、以下のとおりになる。

遼塔および金塔の第一層塔身には、(一定のヴァリエーションを保ちつつ)様々なモチーフが施されている。これは、塔を表面から荘嚴するもので、功德の増幅を目的とし、八大靈塔、仏像、宝塔・経幢、法偈などが(法舍利として)表される。一方、塔内の天宮・地宮に様々な宝物を納入するが、これももちろん功德の増幅を目的とし、仏頂尊勝陀羅尼経幢(一切の如来の全身舍利として)、高僧・王族の遺骨(僧舍利として)などが埋納される。

そのような塔のあり方を保証する背景には、真身舎利の他に法舍利(経典・仏像など)を用いても仏塔建立が可能とする不空訳『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経』、および、一切の如来の全身舎利のなかで仏頂尊

勝陀羅尼を最尊・最勝をみなす仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』の存在が大きい。すなわち、遼塔・金塔とは、その立地状況を含め、それらの功德を効率よく視覚化し、より顕著化し、功德を保証する効果的な手段としての位置付けが大いに期待されていたと理解できよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計4件)

水野さや(単)、「遼塔・金塔における碑形装飾について」、『金沢美術工芸大学紀要』59号、2015年3月、61-82

水野さや(単)、「北京天寧寺塔について」、『密教図像』33号、密教図像学会、2014年12月、1-14

水野さや(単)、「北京市周辺における遼塔の第一層塔身荘嚴モチーフについて - 北京天寧寺塔再考の第一段階として」、『金沢美術工芸大学紀要』58号、2014年3月、57-82

水野さや(単)、「遼代朝陽北塔に関する考察」、『金沢美術工芸大学紀要』57号、2013年3月、91-110

##### [学会発表](計4件)

水野さや(単)、「遼・金代仏塔の特徴とその機能」、国際シンポジウム Frames and Framings in a transdisciplinary perspective(招待講演)、2015年3月7日、於：学習院大学

水野さや(単)、「北京天寧寺塔について」、第33回密教図像学会学術大会、2013年12月7日、於：早稲田大学

水野さや(単)、「遼代朝陽北塔にみる地域性」、学習院大学人文科学研究科特別共同プロジェクト研究会(招待講演)、2013年3月16日、於：学習院大学

水野さや(単)、「中国遼寧省朝陽北塔考」、第24回金沢芸術学研究会、2013年2月8日、於：金沢美術工芸大学

##### [図書](計1件)

朴亨國、平岡三保子、濱田珠美、松尾敦子、田中知佐子、塚本磨充、萩原哉、水野さや(共著)、『東洋美術史』(武蔵野美術大学通信教育課程教科書)、武蔵野美術大学出版会、2015年12月刊行予定

##### [産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

水野 さや (MIZUNO, Saya)  
金沢美術工芸大学・美術工芸学部・美術  
科・准教授  
研究者番号：10384695

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：